

持続可能な福祉のまちづくり

— 第4報；ソーシャル・キャピタル —

Sustainable Town Planning from the View Point of Welfare Design;
Part 4; Social Capital

平松 道夫

Michio HIRAMATSU

はじめに

本稿第1報では、持続可能な社会づくりを目指すためにまず個人生活の視点から、LOHASという健康で文化的な生活をめざすライフスタイルの変革について論じた。そうしたライフスタイルを可能にするインフラとしての居住空間の観点から第2報では、サステイナブル・シティというテーマでこれからのまちづくりの方向性について論じた。さらに第3報では、現代社会においては人間関係が希薄化し、コミュニティが崩壊の危機にさらされているので、新しい環境状況に即した新しいコミュニティの再生と変革の可能性について考察した（平松，2007，2008，2010）。

本稿では、持続可能なまちづくりをすすめるうえで第4の要素として、第3報では十分に説明できなかった良い人間関係をもつ良いコミュニティの構築の可能性について、第3報の「おわりに」で言及した「ソーシャル・キャピタル」(social capital)の観点から考察してみる。

1. ソーシャル・キャピタルの定義

ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の研究は、主として欧米中心に進められてき

た。ソーシャル・キャピタルの定義は研究分野によってさまざまであるが、基本的な構成要素としては、広義でみると「社会における信頼・規範・ネットワーク」を含む、「情けは人の為ならず」「持ちつ持たれつ」「お互いさま」といった互酬性の規範を意味している（稲葉，2011，p.3）。簡単に言えば「人々がつながりを持ち協力関係を築くことは望ましい結果をもたらす」という現象をとらえる概念である（坂本，2010，p.52）。

アメリカ社会におけるソーシャル・キャピタルについて、さまざまなデータを用いて詳細に分析した社会学者の帕特ナム（Putnam, Robert. D.）によると、ソーシャル・キャピタルのレベルの豊かな地域ほどよいコミュニティであることを説明している。一例として子どもの発達環境に関して次のように述べている。

子どもの発達には、社会関係資本によって強力で形作られる。…児童の家庭、学校、友人集団、そしてより大きなコミュニティ内における信頼、ネットワーク、互酬性規範は、広範な影響を児童の機会と選択に、そして行動に影響を与えている。社会関係資本の存在は、とりわけ教育分

野においては、幅広くプラスの結果に結びついている。(Putnam, 2000; 訳=2006, p.362)

近隣の社会関係資本のレベルが高ければ、そこは子どもを育てるのによい場所であることが多い。高社会関係資本地域は清潔で、人々は友好的、そして街路はより安全である。(Putnam, 2000; 訳=2006, p.375)

ソーシャル・キャピタルが豊かであるほどコミュニティが「うまくいく」ことはいくつかの研究で報告されている。それらは教育のみならず、医療・保健・防犯・経済など様々な分野で生じている。

「交際力」(social capital)の潤沢なところでは、たとえば犯罪率がすくないという。近所がおたがい暗黙のうちに注視しているからである。ゴミのポイ捨てや落書きなども発生しない。それにひきかえ「交際力」の貧弱なところではいろんな社会問題が起きやすい。…ジョン・デューイも『学校と社会』の中で、いい近隣がいい教育を生む、と述べている。(加藤, 2010, pp.116-117)

ソーシャル・キャピタルが豊かな地域ほど、失業率や犯罪率は低く、出生率は高く、平均寿命が長い(内閣府国民生活局市民活動促進課、ソーシャル・キャピタル——豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて、2002)。(今村・園田・金子, 2010, p.121・p.123)

都市生活研究の第一人者であるジェーン・ジェイコブズは、『アメリカ 大都市の死と生』(1961)の中で…「社会関係資本」が、安全で秩序だった都市と、危険で無秩序な都市を分ける最大のものであると言及している。20世紀の都市計画・再開発への取り組みを冷

徹に批判する中で、近隣とのインフォーマルな接触を最大化するように設計された都市では、街路は安全で、子どもは手をかけられ、人々も環境に満足していると主張した。(Putnam, 2000; 訳=2006, p.367)

社会的凝集性が身体的、精神的健康に与える影響についての科学研究は、19世紀の社会学者エミール・デュルケームの『自殺論』にまでさかのぼることができる。…最近数十年の公衆衛生学の研究によって、社会的つながりは、われわれの健康の最大の決定要因の一つであることは合理的に疑いえないところまで確認された。コミュニティにより統合されるほど、風邪や心臓発作、脳卒中、ガン、うつ病にかかりにくく、また早死にをしにくいのである。(Putnam, 2000; 訳=2006, p.401)

こうした記述にもあるように、ソーシャル・キャピタルは社会関係資本という言葉のほか、交際力、社会的凝集性、社会的つながりなどさまざまな表現が使われているが、意味するところは同じであり、それらが豊かな社会ほど「良い」、「うまくいく」コミュニティだと説明しているのである。近年、地域社会においてさまざまな社会問題が発生していること、そしてそれらがなかなか解決されない状況にあることは、ソーシャル・キャピタルが現代の地域社会においては「豊かでない」ことから生じているのだと言える。

2. 古くからあるソーシャル・キャピタル類似概念

ソーシャル・キャピタルは、実は、学者が研究対象としてとらえるはるか以前から、「きずな」とか「相互扶助」に象徴される人間関係やコミュニティの価値として、地域社

会の中で人々の行動に影響を与えることは広く知られている。たとえば、日本でも、聖徳太子の十七条憲法には「和を以て貴しとなす」とある(稲葉, 2011, p.1)。かつては、日本国中、どこに行っても地域の生活というのは相互扶助の精神で動き、たいていのことは「話し合い」で決定されていた。たとえば、ユネスコの世界遺産にも指定されよく知られている、飛騨白川の大規模なかやぶき屋根の葺き替えなどにしても、地域住民たちが総出で順番に労力を提供しているから維持が可能なのである。家族構成によって労力提供にバラつきができれば話し合いで調整している(加藤, 2010, pp.12-13)。

近年、人口の都市集中が進み、とりわけ過密都市では人々がひしめき合い、生活時間のズレがあったり、しかもやたらと移動しているので、近隣の人々が顔をあわせて「きずな」を強めたり「相互扶助」のための「話し合い」をする機会がほとんどなくなってしまった。それどころか、都会暮らしは近所づきあいがいいから気楽でいい、という人も少なくない。特に集合住宅では、扉一枚で隔てられた隣に誰が住んでいるかも知らないし、ましては口もきいたことがない人も多い。しかし、実は比較的最近まで、都市生活においても、「遠くの親戚より近くの他人」という諺もある通り、向こう三軒両隣、近いご近所とはおつきあいがあった。もちろん良いことばかりではなく、時にはうっとうしいし気疲れしたりすることもあるが、ちょっと留守をするにもお隣に声をかけて、よろしく願います、ということもしばしばであった。それが安心の源泉だったし、そうした近隣の「相互扶助」は常識であった(加藤, 2010, pp.27-28)。

信頼や規範については多くの先人の業績があるが、それがいまあらためてソーシャル・キャピタルとして再認識され研究対象と

なること自体が、時代の変化を反映しているといえる。国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会が出した報告書「コミュニティ——生活の場における人間性の回復」(1969)の中でも、「コミュニティにおける人間的交流の深まりは、有意義な精神生活と文化的生活を実現するための一契機である」という指摘がなされており、各種のコミュニティ研究においてはつとに「きずな」や「相互扶助」の重要性が指摘されているのは周知のとおりである。実際に、自治会や町内会のような近隣住民組織が発達しているところでは、住民間の親睦、地域のお祭り、地域美化、防犯・防火・防災などの治安、児童福祉や高齢者福祉などが充実していることはよく知られている。その他、教育現場におけるPTA活動、医療現場における患者ネットワーク、企業におけるレクリエーション活動やボランティア活動のように、地域社会、学校、病院、企業など社会生活のあらゆる場面において、人々のつながりや協力関係が重要な働きを持っていることは、自明のことである。(坂本, 2010, pp.52-53)。

これまでのソーシャル・キャピタルの研究は欧米中心に進められてきたことは先にも述べたが、そこで想定されているのは、個人個人の強い自発性や明らかな能動性・積極性を前提とするものであった。こうした前提は、隣近所の「きずな」や「相互扶助」といったところを持ちを重んじる日本の地域社会には、必ずしも“しっくり”いくものではなかった。日本社会には伝統的に強い主張をしない地域活動がたくさんある。良いコミュニティをつくるには、使命感を持って人をひっぱっていく強いリーダーシップが必要な場合もあるが、その活動を多くの人々の間に拡げて継続させていくためには、地味で地道なソーシャル・キャピタルもまた重要なのである。それを、

今村・園田・金子は「“遠慮がちな” ソーシャル・キャピタル」と名づけている (今村・園田・金子, 2010, p.8)。

3. 現代社会におけるソーシャル・キャピタルの意義

地域で発生する問題を解決する手法として行政に解決を求める手立てもあるが、財政難や非効率によって市民ニーズの多様化に対応できないという問題がある。そこで近年、注目されるようになったのが、当事者たちの「つながりの力」による地域における解決 (コミュニティ・ソリューション) である。このコミュニティ・ソリューションの基礎になっているのがソーシャル・キャピタルであると考えられている。コミュニティのメンバー間の日常的な活動によるさまざまな結びつきが、相互信頼と自発的な協力関係を生み出し、それがまさにコミュニティの共有資源 (= ソーシャル・キャピタル) として蓄積され、問題解決の力となっていると考えられるのである (今村・園田・金子, 2010, pp.115-117)。

地域における社会問題解決には、ソーシャル・キャピタルを高めることが重要であるとして、金子郁容は次のように述べている。

社会問題が解決されるにあたっては、…新しい発想による社会的な関係の変化が起こることが必要である。…市民の自発的な行動変容をもたらす住民意識の変化、住民マナー、「お互いさま」という規範意識、「おもしろい」などの力、つまり、ソーシャル・キャピタルが高まることによる新しい力が出現することの効果が非常に大きい。(金子, 2009, pp.6-7)

白波瀬佐和子は「お互いさま」について次のように言う。

お互いさまというのは利害関係を短絡的に見ないで、長いスパンの中でお互いの利益をとらえることです。短期的な利害を超えて、共に豊かな社会への連帯を形成することです。だからこそ、お互いさまの社会を形成するには、「見えること」だけを基準に物事をとらえない想像力が問われているのです。いまは元気で病気などと無縁な人であっても、将来、病気をし、怪我をする可能性はゼロとは言い切れないでしょう。その意味で人の人生はたまたま偶然性の積み重ねの部分もあります。ですから、さまざまな将来のリスクをみなで分散して助け合うことは、みなが考えている以上の利益があります。何よりも、さまざまな年齢にある、さまざまな時代に生きた者がお互いさまの社会を形成することは、助け合いによるさまざまな恩恵を中長期的に循環させていくことにも通じます。(白波瀬, 2010, p.193)

白波瀬自身はソーシャル・キャピタルの言葉は使っていないが、「お互いさま」社会を形成して「助け合う」ことは、ソーシャル・キャピタルを高めることを意味しているのとらえることができる。

現代の日本にも、収入はさほど多くなくても人々とのかかわりの中で創造的なやりがいがある仕事をしたいと願っている人々や、善意をかたちで現わしたいと思っている人はたくさんいるし、多様な文化的背景がそうした思いを支えている。ただ、個人の自発性を社会の主流にしていく仕組みが十分に立ち上げられていないのである。そこで、たとえば、居住地に近い都市空間に「立ち寄って人間らしくコミュニケーションをし、さらに何か有益なことをする」場が組み込まれたりすれば、人々の暮らしを豊かにするために役立つのではないだろうか。さらにハード面で「箱」をつくってこと足れりとするのではなく、ソフ

ト面でのサービスを目的とするNPO組織などと組むことで、ハードを現実人間のための場所として機能させていってこそ、都市空間はコミュニティとして生きてくるといえる(加藤, 2004, p.4・p.106)。

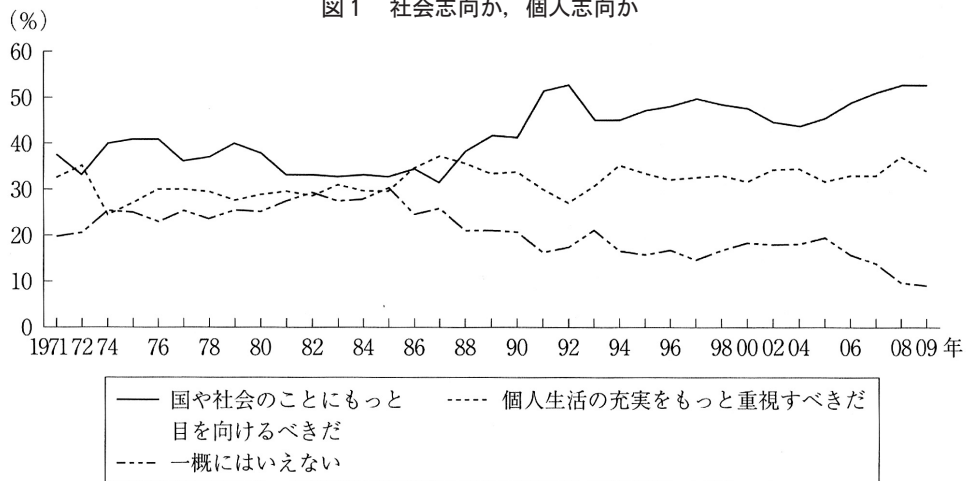
町内会や自治会などの日本の既存組織なども、従来は、その後進性や「お上依存」の受動性という点から批判されてきた傾向があった。とくに町内会や民生委員、ボランティア団体も、一見「ボランタリー」に見えるが、実は、無意識のうちに行政への「奉仕活動」をさせられているという指摘があった。しかし、いくつかの調査によると、そこには「お上への奉仕」というよりは「お互いさま」という共通意識が形成されている例が多くみられる。伝統的な地域コミュニティ活動にも、ソーシャル・キャピタル的要素が多く含まれており、「遅れている」とか「弱い」と考える必要はないと考える。われわれが日本社会を批判的に見るとき、その背後には、西欧から輸入した「近代」の「強さ」「自我」「論理」などの観点があるように見える。近代社会は常に「強さ」が求められ、それが終わりのな

い競争をおおってきた。しかしそれはいまや終焉に近づいている。地球資源には限りがあり、経済成長が無限に拡大することはありえないことが判明している。ない物ねだりをするのではなく、足元をしっかりと見直して、今あるもののよい面をみて、そこから前向きに出発する方がよい(今村・園田・金子, 2010, pp.150-151)。

内閣府の「社会意識に関する世論調査」によると、「社会志向か、個人志向か」を問う質問の回答傾向が、1970年代から80年代後半ぐらいまではほぼ拮抗していたが、90年代以降「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」という社会志向の増加傾向がみられ、近年では過半数に達している(図1)。日本人は決して「個人主義」ではないことがこの調査からも明らかなので、ソーシャル・キャピタルを豊かにしてコミュニティ再構築の実現可能性はかなり高いと言える。

地域共同体にあっては、すべての構成員が、共同体に参加してなんらかの貢献をしたいと願っている。構成員の誰もが何らかのかけがえのない能力を持っている。しかも、そうし

図1 社会志向か、個人志向か



(資料) 内閣府「社会意識に関する世論調査」
 (出典) 坂本治也『ソーシャル・キャピタルと活動する市民』有斐閣, 2010, p.52

た能力を共同体のために発揮したいという欲求をもっている。そうした欲求が充足された時に、人間は自分自身の存在価値を認識し、幸せを実感できるのである。これが「分かち合い」の思想である(神野, 2010, p.14)。そうした無償労働には共同体の構成員同士の間に信頼関係が存在しなければならない。共同体を支えるために役立ちたい、他者の役に立ちたいという自発的な意思がソーシャル・キャピタルになるのである。

パットナムも社会関係資本の試金石は一般互酬性の原則であると述べている。つまり、「直接何かがすぐ返ってくることは期待しないし、あるいはあなたが誰であるかすら知らなくとも、いずれはあなたか誰か他の人がお返しをしてくれることを信じて、今これをあなたにしてあげる」というものである(Putnam, 2000; 訳=2006, p.156)。

おわりに

現在、ソーシャル・キャピタルが注目される背景となっている要因をまとめると、三つあげることができる。一つは、国・行政や市場だけでは十分に解決できない社会的課題が持続してきたことである。二つ目は、現代においては、いたるところでコミュニティが「解体」あるいは「崩壊」していて、社会全体のつながりが消滅しつつあることによる社会的不安が生じてきていることである。そして、三つ目は、それらの社会的課題を解決するには、人々が互いに支え合い、協力しあうといった日常的な相互作用が果たす役割が大きいという、いわば、昔からよく知られている「助け合い」「ご近所づきあい」などという要素が、現代社会でも大いに効力があるかもしれないということが、近年になって、多くの研究者によって、実証的に明らかになりつつあることである(今村・園田・金子, 20

10, pp.120-121)。

吉野諒三は「ソーシャル・キャピタルの多面性」という誌上座談会の中で、ソーシャル・キャピタルと同じものがすでに日本文化の中に強く内在していることを、次のように述べている。

沖縄では「老い」を、それ自体価値ある者とする考え方があり、高齢者ほど伝統文化に包まれていく。老人も死ぬまで心身に応じて働き社会に貢献する場があり、生きがいと収入を見出しながら、それぞれの人が役割をもっている。そして高齢者を大切にすることは、子どもも大切にされる。少子高齢化を憂うべきことではなく、人々のQOL(生活の質)を真剣に考えて方策を練ることが必要であろうと思うようになりました。社会関係資本などという言葉がない時代でも、社会関係資本の科学的測定などがなくとも、社会関係資本が確実に存在し、機能してきた地域や時代があるのです。これが本当の各地、各国で再認識されるためには、我々がいかに貢献できるか考えるべきでしょう。(稲葉・近藤・宮田・矢野・吉野, 2011, pp.29-30の吉野の発言)

「住む」ということは、そこに住む人々とコミュニケーションを保ち、生き生きとした人間関係をつくりあげることでもある。地域生活にはコミュニティがなければ殺伐としたものになる。そしてコミュニティが育つには場がなければならない。お金をかけないで自由に出かけていき、交流できて、自由に楽しめる時間と空間の場である。西欧では伝統的に広場がその役割を果たしている。日本にも西欧とは異なる広場の伝統がある。地域の神社の境内の一角のベンチや低い石垣に、晴れた日には老人たちが寛ぎ、のんびり会話を楽しむ光景をよく見かける。街の人々がよく通

りかかる商店街の「通り」や「辻」の空間などもコミュニケーションを楽しむ典型的な場所であり、最近ではそうしたところにベンチを設けている地域も見かけるようになった(陣内, 2010, pp.246-248)。

近年は、地域住民の集う場として、公会堂、公民館、コミュニティ・センターなどといった屋内空間が紹介されていることが多くある。あらかじめ目的をもって集まるための予約をしたり、知人に誘われたり、何か公開の行事があったりして意図的に参加することがないかぎり、屋内の空間では何が行われているのかわからず、気軽に来てくださいと言われても、遠慮がちな日本人の性格からして、なかなか入りづらいところがある。それよりも、通りがかりに顔を見たのでちょっと立ち止まって話しかけてみたとか、そうした気軽さが人々のかかわりのきっかけとなることが多いので、陣内の言うように、オープンな空間のほうが、ソーシャル・キャピタルとしての人々の「きずな」の形成に大きな役割を果たすのではないかと考える。そのオープンな空間が西欧では「広場」であり、日本では寺社「境内」や「街角(辻)」, 「通り」なのである。

【文献】

- 平松道夫, 持続可能な福祉のまちづくり (その1; LOHAS), 金城学院大学論集 社会科学編 第3巻第2号, 2007, pp.108-114.
- 平松道夫, 持続可能な福祉のまちづくり (第2報; サステイナブル・シティ), 金城学院大学論集 社会科学編 第5巻第1号, 2008, pp.74-83.
- 平松道夫, 持続可能な福祉のまちづくり (第3報; コミュニティの再生と変革), 金城学院大学論集 社会科学編 第6巻第2号, 2010, pp.82-90.
- 今村晴彦・園田紫乃・金子郁容, コミュニティのちから — “遠慮がちな” ソーシャル・キャピタルの発見, 慶応義塾大学出版会, 2010.
- 稲葉陽二, ソーシャル・キャピタルとは (稲葉陽二ほか編著, ソーシャル・キャピタルのフロンティア, ミネルヴァ書房, 2011, 所収).
- 稲葉陽二・近藤克則・宮田加久子・矢野聡・吉野諒三, 座談会 — ソーシャル・キャピタルの多面性 (稲葉陽二ほか編著, ソーシャル・キャピタルのフロンティア, ミネルヴァ書房, 2011, 所収).
- 陣内秀信, イタリアの街角から スローシティを歩く, 弦書房, 2010.
- 神野直彦, 「分かち合い」の経済学, 岩波書店, 2010.
- 金子郁容, コミュニティ科学とは何か (金子郁容・玉村雅敏・宮垣元編著, コミュニティ科学 技術と社会のイノベーション, 勁草書房, 2009, 所収).
- 加藤春恵子, 福祉市民社会をつくる コミュニケーションからコミュニティへ, 新曜社, 2004.
- 加藤秀俊, 常識人の作法, 講談社, 2010.
- Putnam, Robert. D., 2000, Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community (ロバート・D・パットナム, 柴内康文訳, 孤独なボウリング — 米国コミュニティの崩壊と再生, 柏書房, 2006).
- 坂本治也, ソーシャル・キャピタルと活動する市民, 有斐閣, 2010.
- 白波瀬佐和子, 生き方の不平等 — お互いさまの社会に向けて, 岩波書店, 2010.